上高井教育会報

第117号
発行所　上高井教育会
発行人　上高井教育会長　堀内文夫
編集人　会報編集委員長　西原和幸
印刷所　須坂新聞社

＝特　集＝

第八回研究発表会・第七回女教師研究大会

61.11.29　61.11.15

内容の充実した研究発表

十一月十九日（土）須坂小学校視聴覚室において、会員百三十余名参加のもとに、第八回研究発表会が開催された。この研究発表は、会員の研究の成果を出し合い、自己研鑽につとめる会員相互の資質を向上させるための一役を担っている。本年度は、四名の先生により、意義深く、そして興味のひく発表がなされた。

また、十一月十五日（土）には女子会員等百余名の参加によって、同じ須坂小学校視聴覚室を会場に、会員のすばらしい展示作品のなか、第七回女教師研究大会が開催された。意義のある大会であった。

第八回研究発表会の当日は青く澄む気持ちのよい快晴。会場も、開始時刻、午後一時半にはほとんど満席となった。堀内会長をはじめ百三十余名の会員が聞くなか、一人二十分の持ち時間の中で発表が進められていった。

最初は「菊組の子らとともに」と題して小林澄恵先生（須坂小）の発表。日々、子どもから教えられたことの数々の紹介があった。また、子どもがどのように変容していったか。その具体例を示しながらの発表であった。

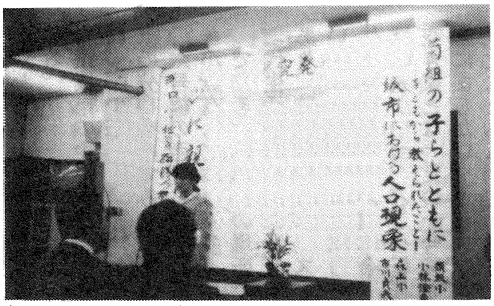
二番目は「須坂市における人口現象」と題しての市川貞夫先生（森上小）の発表。統計上の分析をもとに、人口現象を的確にとらえ、変化していく須坂の市街地についての研究発表であった。

三番目は「山に親しむ」と題して柳原孝子先生（日野小）の発表。中華民国台湾省にある三八八四メートルの雪山（旧次高山）のスライドでの紹介。その後、信州の山々のスライドも見せてもらい、改めて信州の山々のよさの発見を強調された。

四番目に「ヨーロッパの地質研修の旅」と題して原田昇先生（常盤中）の発表。スイスの山岳氷河を中心に発表された。

女教師研究大会も「東南アジア訪問記」と題して河合ちほえ先生（須坂小）の発表。そして、次に「今・性教育」と題して、西沢常子先生（日野小）の発表。最後に長野女子高校の校長、小林倭文先生の講演があった。「女子教育を考える」という演題であった。

いずれの会も意義深く、多くの発表を聞いて自己をふり返る大切さとともに、今後の自己研修の出発点にもなり得たと思う。



菊組の子らとともに

—子どもから教えられたこと—

小林　澄恵

新卒で、精薄児対象の特殊学級菊一組を担任して、二年半が過ぎた。「特殊学級の担任をしています。」というと「大変でしょう。」とよくいわれるが、幸い私は子ども達に恵まれ、とても楽しく毎日を過ごしている。

菊一組には、現在、K君、Y君、M君、Nちゃん、Sちゃんの五人がおり、皆、もう三年のつきあいになる。この子ども達の日々の成長は微々たるもので、はっきりみえるものではないが、三年前と較べるとずい分変わったような気がする。

Y君は、現在四年生だ。身体が小さく、遠視で眼鏡をかけている。私が赴任して半月ほどは、ほとんど会話らしい会話はなく、Y君は話ができないと思っている先生がほとんどだった。

学校で行う様々な活動にもほとんど興味を示さず、ボーッとして、一時間でも二時間でも何もしないで過ごすことが度々だった。どんな活動ならY君も楽しく取り組むのだろうと考え込んでしまうこともあった。

そんな中、前年度から行っていた菊組レストランの活動を開始した。これは土曜日の昼食を作って、先生方にかっていただくものだが、メニューや分担を決める話し合い活動、注文票作り、注文とり、買い物、調理、開店、後片づけ、と多彩な活動が含まれている。

初めY君は、どの活動にも興味を示さず、つきっきりでなければ何もやろうとしなかった。しかし、Y君の好きなサラダを毎回のメニューに入れ、Y君がサラダ係になってからは、キュウリやレタスをもくもくと洗うようになり、回を重ねるにつれ、自分からキュウリやレタスを袋から出し洗おうとしたり、買い物でも、カゴ持ちを喜んでやったり、注文とりを積極的にやるようになり、先生方が「Y君が大きな声で話したよ。」などと報告してくださるようになり、Y君も「ぼく、いく。」と喜んで先生方の所へ行くようになった。

今でも体調や気分の波はあるが、レストランや宿泊訓練等の活動にいきいきと取り組むY君。廊下や事務室で、先生方に声をかけられ、ニコニコしているY君を見ていると、これは身に付けたいと思うことは、気長に時間をかけ繰り返していくと、いつのまにか身につくものだなと思うようになってきた。

また、普通学級の児童もそうだが、特に特殊学級の児童の場合は、担任だけでなく、家族や学校中の先生方、みんなで育てるものだと思う。幸い本校では、先生方も児童もPTAの皆さんも菊組の児童にとても好意的で気軽に声をかけてくださり、「最近のO君はどうだ。」等、きいてくださったりするので、とてもありがたいことと思う。

特殊学級が特殊な存在になりがちだという話を耳にしたりするが、担任が学級の子どものことや活動の様子を日常的に先生方に話をしていれば決してそうならないと思う。

特殊学級は、普通学級に追いつき追い越せの組ではなくりっぱな精薄児を育てるための学級だという話を先日ある会でうかがったが、私も子どもたちと過ごしていく中で、『りっぱな精薄』とはどんな子なのか考えていきたいと思う。

（須坂小）

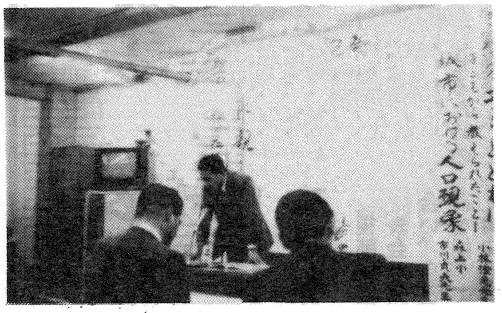
須坂市における人口現象

市川貞夫

去る十一月二九日、上高井教育会主催の研究発表会の折りにお話したことをもとに、その要旨を御報告したい。

私は以前より須坂市の人口の増加現象や、それに伴なっておこる小学校の児童数のうつり変わりに関心をよせてきた。このことについて、資料をもとに須坂市の人口現象を追ってみたのが、以下に述べることである。

まず、須坂市の都市規模を人口面からみるために、須坂市は長野県の中で、どのような地位にあるのかみていきたい。都市人口をみていく場合市域全体の常住人口でみてもあまり意味がない。根子岳の頂上までが須坂市に含まれるようになっても、ここは集落機能の上から都市とはいえない。この点を考慮して、昭和三五年の国勢調査からDID（人口集中地区）人口が調査されるようになった。DIDとは都市部の人口密度が五千人を超える地区のことであり、県下では長野市をはじめ一七市全部と一〇町が国より指定を受けている。DID人口が三〇万人以下、一〇万人以上が中都市とよばれ、長野市、松本市がこれに該当する。須坂市は、DID人口が一〇万人以下、二万人以上の小都市であり、他に岡谷市、諏訪市、上田市、飯田市、下諏訪町がこれに含まれる。



都市の発達の面から、DID人口が二万を超えると、都市化が急速に進み、郊外に住宅団地の開発が行われ、市域全体の常住人口が増加するといわれている。

このような都市では都心における常住人口が減少し、郊外に移動していくいわゆるドーナツ化現象がみられるようになる。

このことをDID人口が二万を超す須坂市と、一万をわずかに超す中野市をとりあげ比較してみた。須坂市においては穀町、上町、本上町、横町が昭和三〇年を一〇〇とし、その指数をみると、昨年は五〇と著しく低下していることがわかり、都心の空洞化現象がみられるようになった。この反面、昭和三〇年代以降より開発の始まった旭ケ丘、北相之島、夏端等の住宅用地が郊外へと拡大され、新しい町を形成するに至った。

一方、中野市においては、中心部の人口は同じく三〇年代に比べて、その指数が一一と空洞化はみられず、わずかではあるが逆に増えていることがわかった。また、長丘、科野、倭などの周辺地区は過疎が進み、須坂市の場合とは対称的であった。

都心部のドーナツ化を最も端的に示すものは、小学校の児童数である。これを須坂小学校と中野小学校でみてみると、前者は昭和四八年の児童数が六五二、今年が四八一と指数は七四と急減、後者は昭和四九年の児童数が一四六二、今年が一三三〇とその減り方は少ない。このことから児童数の推移は、常住人口の減少率に相応した数値となっていることがわかる。

森上小学校や小山小学校も中心部にあって、児童数は停滞している。周辺の旭ケ丘小学校は昭和四六年に開校されたが、この学校区は父兄になるべき年令の人口が減少したため、振興住宅地であるにもかかわらず児童数は急減している。

須坂市の中でも、特に人口減少率の高い穀町を中心に空家の分布をみてみた。国道四〇六号線の西側に数十戸の空きが点在しており、多くは長屋である。これらの場所では、現代生活を送るには手ぜまであり、駐車場のスペースもないなどの諸要因が重なり、転住していく。どんな年令、職種の人がいつ、どこへ転住し空き家となったのか今後の調査にまちたい。またスプロール化にともなっておこるであろう区費の減少、隣組の再編成などの問題もあろうかと思う。

須坂市の企画課では、市街地再開発の一環として、次のような長期構想をもっている。対象となる区画は国道四〇六号線、松風寿し屋さんの通り、勝善寺前の通り、金井原通り、穀町公会堂から竜ケ池に向かう通りに囲まれた上部地区一二ヘクタールで上町、穀町、本上町、坂田町が含まれる。土地区画整理をし、道路、公園などの公共施設、住居、商業地区の整備を行っていく計画である。

いずれにしてもこの区画は長屋の多いところであり、長屋の居住者の一部が転住しても、残住者の全面的移転がない限り、再開発はかなりむずかしいなど多くの問題をかかえている。須坂市の発展にとって地域の活性化の面で今後検討していくことが重要であろう。

（森上小）

研究発表会に参加して

堀込　富平

日増しに寒さが加わる晩秋土曜日の午後でしたが時間を忘れる思いで聞きました。

小林澄恵先生の新卒三年間特殊学級指導の実践成果。ビデオに映る晴れやかな子どもたちの活動、学習の度毎に深まる先生との心の通い、成長する姿に心を打たれました。

市川先生の長年のご研究、須坂市の都市機能を常住人口と重ねて、資料、グラフを駆使して考察され、私ども毎日住んでいる須坂市に新しい見方を広め得ました。

柳原孝子先生のご発表。富士山より二〇〇㍍余も高い台湾玉山、山男ならぬ山娘の健脚の登山報告を聞けたことは印象深い。高山でありながら頂上まで樹木帯が上がっていることにヨーロッパ高山と極めて異なる事態、驚異でした。

原田先生の地質の旅。スイスアルプスの造山的な美しさの話に〝なる程〟の納得を得ました。滑落面を思わせるあの峠の氷河の流れ跡、なめらかな清潔な岩肌は流れ下った雪泥とは対称的に美しい圧巻、思わずじっと見入った。

体験できない数々を拝聴できたことをうれしく思います。

（豊洲小）

羽田やよえ

研究発表会に参加させていただき、いろいろな面で大変勉強させていただきました。

障害児教育に取組んでおられる先生からひとりひとりの児童の可能性を引き出すためにご苦心されている発表をお聞きして、教育とは何かと私自身に問いかけられている思いで聞いておりました。

須坂市の人口現象についての発表では、都市化が進むことにより、かつての町の中心部に人口流出というドーナツ現象が現れてくることを各種資料で説明していただき興味深く聞かせていただきました。

中華民国台湾省の環山に登られた先生から美しいスライドを見せていただきながらの発表で、私も機会があったらと思いながら聞いていました。

ヨーロッパ地質研修に参加された先生からスライドを写しながら、造山運動の仕組や氷河が現在のアルプスを創り出してきた過程を発表していただきました。アルプスの雄大な姿を見せていただきながら自分も山へ登ったような気分で聞いておりました。研究発表をしてくださった先生方に厚くお礼を申し上げます。

（井上小）

山に親しむ

柳原　孝子

私は、七月二十九日から八月五日まで、信教百周年記念事業、中華民国台湾省雪山登山に参加しました。

台北市から台中へ列車で行き、バスにてタイヤル族の村、環山へ入りました。武陵農場から雪山に登り、三六九山荘に二泊して環山にもどりました。そして、宣蘭を経て、台北市より帰国しました。

台湾には、三千メートル級の山が百三十以上もあるそうです。日本は二十五位と聞いていますから、数の上だけでも台湾の山の深さを想像することができます。その中で、最と高い山が、玉山（旧新高山＝三、九九七メートル）です。私が今回登ったのは、雪山（旧次高山＝三、八八四メートル）です。

私が山へ行くのは、何かを研究するために行くわけではありません。もちろん、安全に山へ行くために身につけておかねばならないこと、装備やザイル操作等学んではいますが、特に研究しているわけではありません。ですから、研究発表ということは心苦しい気がしました。しかし、信濃教育会長、太田先生の「信州は山国です。山をぬきにしては信濃教育は語れないのですが、特に研究しているわけではありません。ですから、研究発表ということは心苦しい気がしました。しかし、信濃教育会長、太田先生の「信州は山国です。山をぬきにしては信濃教育は語れないのではないか。そのためにも、今回のような海外登山、夏の山岳講座を大切に考えています。」という壮行の言葉を思い出して、私が山の話をすることも意義あることかもしれないと思いました。教育会長先生のお話は「山や自然に親しむ心を持て。」ということではないかと思います。

台湾や県外の山に行ってみて、長野県は、すばらしい自然にめぐまれた県だなあと実感しています。夏の緑の瑞々しさ、秋の紅葉、冬、そそりたつ白い峰、どこかにあたたかさを感じさせる春の山。このような山に親しむことと、教育とどうかかわるのかと問われてもわかりません。正直なところ、無理に理屈づけしたくないところでもあります。ただ、山に行き、自然に親しんだあとの充実感、きれいな景色を見て心に残る感動、そういった思いをもって子どもの前に立つ、それだけです。

そんなわけで、私の雪山登山の目的は、「海外の山のピークを踏んでみたい。」ということでした。

雪山は、日本の山より森林限界が高く、富士山よりも高い山に登っているという感じはしませんでした。また、高山植物も、可憐なタカサゴユリに心をひかれたぐらいで、あとはあまりみかけませんでした。しかし、目的を達成して私はおおいに満足して帰ってきました。

一緒に行った隊員の先生方の研究熱心な姿勢に心を新たにさせられたこと、現地の方との交流など、私にとって意義ある海外登山となりました。そして、もう一つうれしかったこととして、上高井の多くの先生方と山の話をすることができたことをあげたいと思います。多くの先生方が山に親しみ、自然に親しむ心を持っていられることを知り、うれしく思ったわけです。

私と山とのかかわりは、この上高井に来てから始まりました。ハイキング好きの先生に連れていっていただいた低山歩きがきっかけです。そのころは、登山というよりも、自然探索、主に植物観察に興味を持っていました。果実酒作りに精を出したのもこのころです。大町山岳センターの自然探索講習会、臨地講習「植物」などへ積極的に参加しました。いろいろな自然の姿にふれたくて、山岳センターの夏山講習会、信教の山岳講座にも参加してみました。教えてもらった植物名はすぐ忘れ、夏山ではまっさきにばてました。そんな繰り返しのうちに山好きの友がふえ、本格的に登山をするようになったのです。

私と山や自然とのかかわりの形は、これからも変わるかもしれませんが、ずっと山に、自然に親しんでいきたいものだと思っています。

（日野小）

女教師研究大会

東南アジア訪問記

河合ちほえ

七月二十八日から八月七日までの十一日間、私は信濃教育会主催の東南アジア教育視察で、インドネシア・シンガポール・タイの三ケ国を訪れた。短い間ではあったが、東南アジアで生きる人々の姿にふれ、貴重な体験ができた。

各地の子どもの姿から、私の心に残っていることを述べてみたい。

最初の訪問地はインドネシアのバリ島であった。空と海とがどこまでも青い。ヒンズー教のかおりただよう小さな島である。バリ島に古くから伝わるバロンダンスや力強いケチャックダンスなどが印象に残っているが、それよりもあざやかに思いだされるのが、物売りの子どもたちである。絵はがきやキーホルダーを手にして、観光バスが着くたびに「シェンエン・ヤスイヨ・カッテ」とかたどたどしい日本語を叫び迫ってくる。どの目も真剣そのものである。この島の人々は、ほとんど農地を所有しており、食べるのには困らないが、現金収入が困難なことを後から聞き、あの光景が納得できた。バリ島の子どもたちから、ひたむきに生きる力とたくましさを感じた。

ジョグジャカルタでは、中学校を訪問した。机と黒板しかない教室で、先生のお話だけで進んでいく授業。コンクリートの小さな中庭や楽器がひとつもない音楽室。しかしそこで学ぶ子どもたちは明るく素直で、くったくのない笑顔がまぶしかった。

発展のいきおいのめざましいジャカルタ。車を初め、いたるところで日本製品が目についた。ジャカルタの訪問先日本人学校では、ちょうどその日から夏休みで、子どもに会うことはできなかったが、おみやげにいただいた子どもの文集や、校内の掲示物などから、異国の地で学ぶ子どもたちの姿が想像でき、先生方の苦労がしのばれた。

シンガポールでは実明工芸中学校というテクニカルスクールを見学した。この国には大学がひとつしかないので、小学校で選抜テストがあり、各コースにふりわけられる。東南アジアの最大都市として急速に発展した理由が、このような教育制度からもうなづける。この中学校は、設備等立派で、工業の発展に力を注いでいる国状がわかるようだった。

最後の訪問地のタイでは、中～下流階級の子どもが通うワットファランポン小学校を訪れた。この小学校の子どもたちは、仏教が心に奥深く根づいていた。胸の前で小さな掌のひらをあわせて頭を下げる敬けんな姿に、美しさを感じた。学校をあげて私たちを歓迎して下さり、伝統的なタイ舞踊の練習風景を見せて下さった。伝統文化を大切にして、学校教育にとり入れている態度に心うたれ、はっとさせられた。私たち日本人も、もっと自国の文化を重んじていかなければならないと感じた。

東南アジアの国々は、決して豊かとはいえないが、人々は自分の国を心から愛し、子どもたちはキラキラと輝く瞳を持っている。それは自国の文化や伝統を誇り、生活の中で守っているからであろう。この旅行を終えて、私は、子どものもつ笑顔を大切にして生きたいと思った。そして日本を愛し、決して卑屈にも尊大にもならずに自国を語れる国際人になりたいと思っている。

（須坂小）

今、性教育

西沢常子

九月中旬、養護研究委員会で郡市六校の中学二年生を対象に「性に関する」アンケート調査をしたところ、想像以上に豊富な知識を得ていることがわかり大変驚いた。これらの知識の殆どをマスコミ、特にコミック誌やフォート雑誌から得ていることもわかった。彼等からそれらの雑誌を一晩借りて目を通した。表紙にはいかにも清純そうな女の子が微笑んでいる、が、中味は大胆な姿態をした女の子の裸やら、男女の性交渉の写真やテクニック、そのための道具、そして裏ビデオの紹介等々、成人向け雑誌顔向けのものであった。

冊数を重ねて見ているうちに、大変ばかばかしく、情けなくなり、腹さえ立ってきた。何で女の子ばかりが写真のモデルになっているのだろう。それも嬉しそうに、楽しそうに写っている。彼女達は一体何を考えているのだろう。この本を企画発行した人は世の中に何を求めているのだろうか。

ふりかえって世の中を見ると、週刊誌や月刊誌はもとより、文学界の小説も、テレビも映画も、性に関する内容のものが余りにも多い。それも性交渉をリアルに、どぎつく表現している。世の中まさにセックスオンパレードである。この溢れる性情報の中にあって、子どもや若者は、何をどのように選択していくのだろうか。選択するための確かな目は育っているのであろうか。私達教師はその目を育ててきたであろうか。教え子の例をあげて、反省してみようと思う。

例1、高校を卒業したばかりのA子がフッと学校へ訪ねてきた。以前勤めていた学校の教え子である。近況などを話しているうちにA子の様子が少し落ち着かないのに気付く。ダボッとしたトレーナーの上下につつまれた体つきにも娘らしからぬ丸味が感じられる。「妊娠しているのではないか?」の私の問いを否定するA子であったが、しばらく話しを続けるうちに妊娠していることを認める。二度目の妊娠であった。その相談に来たらしい。お腹の子を生むことを前提にあらゆる努力をすること、場合によっては私も援助に出向くことを話し合い、約束してA子は帰った。私はA子からの連絡を待った。が、三週間たっても連絡がないのでこちらから電話をする。A子はすでに五ヵ月の胎児を墜してしまっていた。「先生、絶対彼と手を切る。二度も中絶したし……。」と言っていたA子。二ヶ月後にはまたその彼と同棲を始めてしまった。

例2、中学時代から付き合っていたB子とC男は、中学卒業と同時に進学せずに同棲を始めた。六月末、スーパーで会ったB子は、幼い顔に化粧をし、黒のストッキングにミニスカート。「幸せ、大丈夫、うまくやって行くよ。」と胸の買い物袋を嬉しそうにだきしめた。夏休みになって、C男が恐喝で少年院送りとなった後、C男の知り合いの中年男性がB子に接近するようになり、暮れを前にB子の姿は町から見えなくなった。

あるデータによると高校三年生の二〇%前後が性の体験をもつという。何故に彼等はいとも簡単に性交渉に入ってしまうのか。後で心身共に傷つく場合が多いはずなのに。

興味本位の性情報に押し流され、不幸な若者や子どもが生まれないよう、生命及び人権の尊厳、男女の理解と協力を基本とした性教育を、今、この時代にこそ、教師は本腰を入れて押しすすめる必要があると思うのである。(日野小)

女教師研究大会に参加して

中島和代

本年より、上高井にお世話になり、初めてこの大会に参加しました。この会は、一四一名(三一%)からの女教師で組織されているということですが、この大会にも、百名以上の会員の参加がありました。

世話係の三溝先生、小林委員長の挨拶のあと、研究テーマである「人間性豊かな児童・生徒を育てるために、私たちはどのように研修したらよいか」を受けた委員会報告がありました。木島平村北部小土屋真帆子校長先生にお話を伺った学校訪問、S男君やT子さんへの実践例、アンケート〝女の先生に望むこと〟のまとめなど、数々の貴重な研究が発表されました。続いて会員発表があり、須坂小河合先生から「東南アジア訪問記」ということでジャカルタなどを訪れてのお話しがあり、最後に「これからの日本人は国際人たるべきだ」と言われたのが印象的でした。

日野小西沢先生の「今・性教育」という発表では、男女平等・生命の尊厳・人間の生き方といった全人間的な教育をしたい、しなければいけないのではないかというお話が強く心に残りました。講演の長野女子高小林先生からは、教師として、人間としてのあり方を教えられました。この会に参加して再度わが身を顧みるよい機会となりました。

(小布施中)

郷土の文化財 ⑯ 高社神社の幟

高山村千本松

「萬戸開国産」「闔郷浴神恩」と書かれたこの幟は、明治三十六年、源隆道に揮毫を依頼し、当社に奉献された。

高杜神社は、千本松、堀ノ内、水中、久保、赤和、荒井原、紫、二ツ石、新堀、緑ヶ丘の十地区の合祀であるが、常に千本松の大幟を本殿前に掲げられている。その理由は判明しない。

高杜神社の由緒記によれば、「高毛利の神は、本郡の開祖にして、其の子孫代に県主の職を襲ふ。」とあり、県塚は高位の牧の支配者を葬った古墳であると伝えられている。

源隆道は、長野に住んでいたが、その後、松本に移ったといわれる。本人は支那(中国)で書道の勉強を研鑽されたという。

(神林)

編集後記

「第八回研究発表会」そして「第七回女教師研究発表会」の特集として、一一七号をお届けいたします。二学期末の多忙の中、発表者の先生、そして参会しゃの先生にご寄稿いただきましたこと、厚くお礼申しあげます。

原田昇先生(常盤中)の『ヨーロッパの地質研修の旅』は、上高井戸教育第四十三号にご寄稿いただく予定です。

よいお年をお迎えください。

(神林・小山)